新潮文庫

子を貸し屋

宇野浩二著

新潮社

子を貸し屋

定價100圓

新潮文庫

昭和二十五年一月二十日　發行
昭和三十八年十一月二十日　九刷

著者　宇野浩二

發行者　東京都新宿區矢來町七一　佐藤亮一

發行所　東京都新宿區矢來町七一　株式會社　新潮社
電話東京二六〇局一一一一(大代)
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは小社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・塚田印刷株會社　製本・笠原製本所

© Printed in Japan

新潮文庫

子を貸し屋

宇野浩二著

新潮社版

88

目次

人心……七
一と踊……九五
あの頃の事……一三
子を貸し屋……一五九
解説　川崎長太郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

子を貸し屋

人

心

はしがき

私は小説家であります。日本文壇の小説家の末席に列する光榮を有する、きはめて新參者の小説家の一人であります。名前ですか、名前はどうかおあづかりねがひたい。いはなくても、いろいろとお話ししてゐるうちには、賢明なる諸君のうちにはほぼお察しになる方もありませうが、どうか、私自身の口から申し上げることだけはお許しください。

經歴ですか、それはほとんど何の經歴もなしに、三十歳になつたといふのが、もつとも適當ないひかたでせうか、私は、かつて家庭らしい家庭にそだつたことがなく、といつて、ひしひしと他人の鞭にたたかれて、しあげられたといふわけでもなく、さうして、いつか、三十歳になつたまで、もとより、財産もなく、といつて、職業らしい職業にもついたことがない、諸君、『ボッカチオ』といふ歌劇のなかに、一人の旅の學生が、「君はなんの職業をなされたか、」と聞かれて、「恥づかしながら、なんにも。……だが、二科目ばかり、少々……」と答へるところがあるのを御存じですか。「なになにを、」と相ひ手にとはれて、旅の學生が答へていふのに、「酒と女について少々ばかり。」

あのいひかたを借りますと、私も、「二科目ばかり、少々……」と答へませうか、「なになに

を、」と諸君が聞かれるならば、「女と金について、少々ばかり、」と答へませうか。「待ちたまへ、」と、諸君のうちに、「君の女についての小説をかつて讀んだことがあるが、察するところ、君は、一年生も、二年生も、やらないで、つまり、正當の課程をふまないで、少々ばかり特殊研究でも、やつたのではないか、」といふ人がありませう。それには、私は、ほほゑんで、答へますまい。

さて、話しといふのは……

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

どうして、どれほど、どんな妻に、今はすぎ去つた月日のことであるが、私がなやまされたものか。實際、その時の私の苦勞は幾棟の藏をたててもたりないほどであつた。その時の私の苦勞には、實際、富士の山だつて立つたにちがひない。それは、私の友だちのうちのほんの二三人が、それもおのおの極くその一端を、べつべつに、さうして、きれぎれにしか、……だが、結局、誰も知らないことだ。さうして、知つてゐるのは神樣のほかにはないのだ。

だが、來る月日のおそさにくらべて、過ぎてしまつた年月の早さ。それから、もうまる二年の月日が小鳥の影のやうにたつて行つたことだ。私の目には、まだ、自分と自分の身を藝者に賣つて、かがやいた秋の午後の日のことに、ふとつた大男の桂庵につれられて、上野廣小路で、動かうとする電車に、車掌にうながされながら、送つて行つた私を見かへりがちに、ひよいひよいと、とびのつた彼女の姿が、そのとき日の光りにちらちらと光つた彼女の白足袋の足が、ありありと、昨日のことのやうに殘つてゐる。だが、私たちはそれきり顏を見なかつたわけではないのだ。なぜなら、自分と自分の身を藝者に賣つたのは、彼女の心からではあるけれども、さういふ心になるやうにしむけたのは、わかれ話しを自分から持ち出しかねて、それをしないで、しぜんと彼女

から逃げようとした私の猫智恵からなのであつた。だから、さうとも知らない、わがまま者だが、正直者の彼女は、その後、自分が身を賣つた横須賀の藝者屋から二度までも逃げ出して私にあひにも來たし、それから又、かどはかされた八王子の桂庵の目をしのんで、二三度も、その頃もやつぱり何の職業も持たず、したがつて金もなく、辛うじて一人の友人の下宿から他の友人の下宿へと、轉々としてゐた私の後を追うてたづねても來たことであつたのだ。

それの最後は、去年の秋のことだ。それはちやうどその時ゐた私の下宿に、それまでにもさんざん延ばしてもらつてゐて、その時その時に調子のいい口實をかまへて來たのだが、いくら何でも、どうしても今日明日のうちに何程かの金を入れなければ、もうそれ以上ゐたたまらなかつたといふやうな時だつた。それにもかかはらず、私には、何と金策のしやうもなく、といつて、厄介をかけに行けるだけの友だちといふ友だちのところへも餘りたびたびのことだつたので、足のむけやうがなかつた時のことだつた。私はどんなにか困つたことだ。思案にくれてゐたが、それがもうすつかりつきはてて、今はもう心の中がからッぽになつて、實は何にも考へてゐなくて、ただ顏や形だけがそんな風に見えるだけにちがひないといふことも、私自身に知つてゐたのだが、私はどんなにか困つたことである。さうして、ただふらふらと町をあるいてゐた。その時、私はむかふからあるいて來る、大きな鬱金色のふろしき包みをせおつて、尻からげをして、メリヤスの股引に板裏の草覆をはいた、五十がつかうの男に呼びかけられたのだつた。それは私の知つた人間だつた。彼は、私の國の町のちかくのある田舍の、そこに私が今から十年も前に病氣をして一

年ばかり轉地をしたことがあつたが、そこのある金物屋の主人の弟なのだ。そこに娘があつて、その娘が、小說がすきで、私のところへしじゆうさういふ類の本を借りに來たのが元で、私は彼女と一と通りならず仲がよくなつた、彼女の名はお秋といつた、だが、お秋との話しはまた別の時にしよう、やがて、私はお秋をとほして彼女の父の、つまり、金物屋の主人とも、また當時、朝鮮に金まうけの事業に出かけて行つたのだが、失敗して歸つて來て、そこに居候をしてゐた、その主人の弟の、お秋の叔父の彼とも懇意になつたのであつた。ところが、私が、その後、東京に來てから間もなく、この男の、（名は仲戸丈助といつた、）訪問をうけたことがあつた。その時、彼がいふには、どうかして、この東京で、つまらない商賣からでも出發して、おくればせだが、ひとまうけして身を立てたい、だが、なにぶん馴れない土地のことだから、この上とも懇意にねがひたい、といつてみやげにアンパンの一箱をおいて行つた。以來、彼は七八年のあひだに四度も商賣をかへ、そのあひだに、彼の妻に死にわかれ、さんざんな苦勞をしたらしいのだが、その間、おなじやうに餘り樂な日を送つてゐなかつた私は、たのまれがひもなく、なんの彼の力にもなつてやつたことはなかつたが、今では彼のはうは諸所の吳服屋から切れ屑を買つて來て、それらをもつて小切れ賣買といふ商賣をはじめたのが、それがやつとあたり出して、しだいに目を吹き出して來てゐたらしいのだつた。だが、彼は、すこしもゆだんしないで、一ぱう數人の人を使ふとともに、自分自身もかうして大きな、鬱金色のふろしき包み、——それにはむろん商賣の小切れが一ぱいはひつてゐるのだらう、——をせおつて、電車にも乘らずにあるいてゐるのにちがひなか

つた。

その時、私が彼にあつたのは、その六七ケ月まへ、私がわかれた妻になにかのことからヒステリイをおこされて、それの仲なほりに活動寫眞に行くためだつたか、それともなにかたべ物でも買ふためだつたか、わざわざ電車に乘つて、（彼の家は淺草だつた、）きたない溝川の前の往來に面した、乞食か屑屋かの家のやうな、（それがまた屑屋にちがひなかつたのだから、）それでもガラス戸のはまつた店の中に、切れ屑の山の中にうづまつてゐる彼をたづねて、四五日ちゆうにきつとかへしに來るからとことわつて、金二圓借りぱなしにした以來の出あひだつたのだ。

「どうしてをられるんや、その後は、」と、變な、彼獨得の、言葉で、平べつたい、五十歳よりは若く見える顏に、平べつたい鼻を、風でも引いてゐたのだらう、くつくつならしながら、善良な笑ひをうかべて、彼は、かう聞くのだ。

「いや、どうも、いや、どうも……」と私は、頭に手を上げたり下げたりしながら、いふべきことばを知らないのだ。すると、

「おかあさんは、どうしてをられるんや、その後は、」と彼は、鼻を絕えずくつくつならしながら、こんどは私の母の安否を聞くのだ。

「母は田丸の家にあづけたきりになつてゐます、」と私がいふと、

「あの女の人の『しまつ』はもうついたんやろ、」と彼は、彼も私のわかれた女と私との事件を間接に知つてゐるので、かう聞くのだ。

「ええ、その方はつくにはついたんですが、どうも、その……」と私がまたいふべき言葉がなくて困つてゐると、

「これからどこかへ用事に行くんだすかい、」と彼は、聞いて、私が、用事などはない、ただかうしてぶらぶらあるいてゐるだけのしだいだ、と答へると、

「そんなら、私も、ちやうど、これから、この荷物をすぐそこの家においたら、もうをはりやから、一ぺんわしのうちへ一しよにお出でなされ、いろいろお話ししませう、」といつた。さうして、私はただうかうかと彼についてあるいたことだ。

「あんたはこれからどうするつもりや、」と彼は私に道をあるきながら聞くのだ。

「これから、さあ、さうです、小説をかくつもりです、」と私は答へたものだ。

「ぢやあ、今まではなにをしてゐたんだす、小説やなかつたのかい、」と正直な彼は一途に私のことを心配して聞くのだ。

「今までのは本當の小説ぢやなかつたのです、」と私は困つてから答へたものだ。人の飜譯の下飜譯や、おとぎ話しや、それもない時はただぶらぶらと、つまり、仕事がなくて、日を消してゐたとはいへないのだ。で、かんがへかんがへ、本當の小説を書くにはすくなくとも二ケ月や三ケ月くらゐ金の心配をしないで食つて行つて、そのあひだに書きあげなければできない、といふやうな答へをしたものである。そしたら、

「ぢやあ、なにか、さうしたら、それからあとはうまく行けるんだすかい、」と正直な彼は鼻を

ならしながら聞くのだ。

「行けるんです、」と、私は答へた。すると、丈助は、

「そんなら、うちの二階があいてる、あそこでもかまはなけら、あそこへ來なされ。そして、二ケ月でも、三ケ月でも、わしたちとおなじものをたべて辛抱する氣イなら、おいでなされ、」といふのだつた。で、私は「ぢやあ、下宿のはうを『しまつ』をして、今夜からごやつかいになります、」とさつそく答へたものだ。さうして、彼とわかれて下宿に歸つて來たのだが、もとより、下宿の始末のしやうどころか、私はその時たしかふところに金三十錢しか持つてゐなかつたのであつた。私はやつぱりすまないが、いづれそのうち工面をして、さうしてはらひにくるから、と心のなかでわびながら、原稿紙と手まはりのものをふところにねぢこんで、下宿屋には、「ひよつとしたら、今夜は歸つてこないかもしれぬ、そのかはり、明日の午後にはきつととどこほつてゐたお拂ひをすつかりするから、」といひおいて、それから、その淺草の切れ屑屋の仲戸丈助の家にゆくみちで、別に大した用事もなかつたのだが、ちよつと本郷の友だちのところによつたものだ。ところが、その友だちにわかれをつげて、そこの下宿の玄關を出ようとすると、私は、私の目の前に、わかれた私の女が向かふからうれしさうに笑ひながら、走つてきて立つたのを見たのだ。彼女のいふのには、彼女は彼女を横須賀の藝者屋からかどはかした八王子の桂庵の手から、その桂庵ははじめは彼女を利用して何事かをたくらんだのにちがひなかつた、だが、かどはかしたその桂庵さへもことごとくヒステリイの發作をおこすところの、彼女の氣ままを制御する

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com